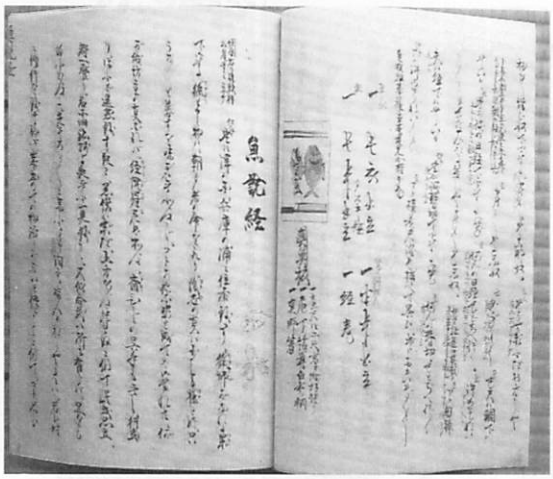
明日の狂言師

若い人たちに、
もっと古典を楽しんでもらえれば・・・・・
現在、古典と呼ばれているものは
最低でも百年以上の歴史がある。
それだけの歳月に
耐えるだけの力を秘めている。
いろんな新作もあるけれど、
やっぱり古典にはかないません。

大蔵流狂言師【MASAKUNI SHIGEYAMA】

茂山正邦



能舞台で演じられる物語はしばしば悲劇的なものが多い。総じて厳粛な性格を帯びた舞である能は、本格的に演じると八時間にもおよぶと云われる。もちろん、もっと短い番組もあって、十六世紀には五番の能が定められた順序に従って舞われるようにもなった。だが、厳粛で悲劇調のものばかりでは観衆もまいって？しまう。そこで気分をやわらげるために、能の間に狂言を演じるという習慣が生まれた。

そのような狂言（これを間狂言という）には、実は先に演じられた能をもじったものや、はっきりと嘲笑を必要とされた。禅の思想が色濃い厳粛な能の舞から、一転して狂言による現実的な喜劇の世界が現れ、また、能へと戻ってゆく・・・五百年以上もの昔から伝わる、シェークスピアにもみることのできないこの鮮やかで高度な演劇は、そうした能と狂言が対峙することで成立する。

だが、その担い手となる人物について実像を知る機会は稀だ。わけても、小松左京作の脚本をはじめ、『今の空気』を取り入れた舞を数多く演じながら同時に古典的芸能の良さをあますところなく守り育てつづける狂言師たちの存在には、大いに興味を魅かれる。ことさら観阿弥・世阿弥と足利将軍家の関係をもちだすまでもなく、京都はその姿を語るにふさわしい都市でもある。そこで大蔵流狂言で名高い茂山家を訪れた。

昨年二月“釣狐”を演じてひとり立ちした茂山正邦さんは二十二歳。人間国宝・四世茂山千作氏の孫にあたるその人である。

●

「千鳥という狂言があります。主人と、主人に仕える太郎冠者がでてくる芝居です。あるとき主人は、太郎冠者に酒を買って来い、と命じます。ところが、主人は酒屋にたくさんのツケをためている。太郎冠者は“酒を売ってもらうことはできないだろう”と云いますが、主人は、“お前は酒屋と仲がよいから、うまいことをいって買うて来い”と買いにやらせます。

酒屋に着いた太郎冠者は、考えた末に尾張（現在の愛知県）の祭の様子をおもしろおかしく身振り手振りで語りはじめます。酒屋の主人はたいそう喜んでツケのことはすっかり忘れてしまい、太郎冠者はまんまと酒樽をせしめることに成功する・・・

これが現在、演じているものの中で、わたしがいちばん気に入っている狂言なんですよ」

そう語る茂山さんが初舞台を踏んだのは四歳。おさない時から狂言の練習や舞台が嫌だと思ったことはまったくなかった正邦さんだが、中学生になると事情がかわった。狂言の舞台は土曜、日曜に行われる。みんなが遊んでいるときに、自分はどうして同じように遊ぶことができないのか。それが狂言師の家に生まれた約束ごとだとわかっていても、楽しそうに遊ぶ友だちの姿は羨ましかったという。さらに高校二年の秋からは、日曜や祝日がまったく休めない状態になることもあった。

狂言の稽古は、毎日あるのではないそうだ。公演のはじまる一、二か月前から本格的な練習がはじまるという。学校から帰って一時間から二時間くらいの稽古を行うが、これで勉強もするとなれば、たしかに遊んでいる暇はほとんどない。ただ、父も祖父も、狂言の楽しさ・おもしろさを理解することを基本に稽古にあたったという。茂山家では、代々、祖父が孫に稽古をつける。正邦さんもやはり祖父から指導を受けてきた。いずれは父、そして祖父の名を継ぐべく、今では狂言のおもしろさ、醍醐味に夢中だ。もちろんそれは当然のことだともいえるが、広々とした応接間でかつて遊びたかった時期のことを語る正邦さんは、狂言師の顔から二十二歳の青年にもどっていた。

「結局、狂言というのは“室町時代の吉本”みたいなものなんですよ。そういうものだと思うんです。言葉づかいや動作は昔のものですが、ほとんどが喜劇です。それも理屈なしに笑える、おもしろいものばかりです。それを、自分なりにどう演じて、個性を出していくのか。

自分自身で感じる狂言の醍醐味といえば、やはり客席からの反応がよかったときでしょうか。舞台に立って、客席の雰囲気を肌で感じる一瞬ですね。それは、自分のひとつひとつの動作とまっすぐにむすびついているわけですから、手ごたえを感じた瞬間というのは、ちょっと口では言い表せないほど気持が昂ぶりますよ」

関西の狂言は、関東とくらべると、グッと庶民的なのだそうだ。いわく、「ちょっとコテコテ」のところもあるという。茂山家の狂言も、格式ばらず誰からも気軽に声をかけられる存在でありたいと語る。いつも接してあきがこない、それでいて味わい深い狂言。過去には歌舞伎や新劇などとの共演や、宇宙人が登場する新作狂言など、ユニークな試みを率先して行ってきた（昭和三十年代から、幾度もジャーナリズムの注目を集めた）茂山家だが、正邦さんも若い世代への呼びかけとして、そうした挑戦をこれからもつづける必要があると考えている。ただ、

「でも、最後はやはり古典を楽しんでほしいですね。なぜなら、現在古典と呼ばれているものは最低でも百年以上の歴史があるわけです。それだけの歳月を耐えるだけの力が古典にはある。いろんな新作がありますけれど、やっぱり古典にはかないません」

それが伝統というものだろう。

文・三村　渓／写真・大田　メグミ

PROFILE

上京中学校から東山高等学校を経て立命館大学・文学部中退。“茂山ファミリー”の一員として四歳で初舞台を踏む。以来、幾多の公演を経て昨年二月十七日『釣狐』にて狂言師としてひとり立ちを果たした。現在、能楽堂から学校巡演まで、全国各地で奮闘中。特に秋の公演期間には二か月間、休みなく舞台にたちつづけるという。今、いちばん望むことは自分と同世代の人々へ、もっと狂言をアピールすること。さまざまな新作狂言からそのおもしろさを訴え、徐々に名作古典への共感を呼ぶことができればと語る。父は十三世茂山千五郎。祖父は人間国宝・四世茂山千作。弟の茂とともに、茂山家の未来を担う若手狂言師のホープである。